

時事新報

實業教育の第一着

普通教育の國民に必要な事は明白の事實なれども漫然たる讀書學問は決して教育の本旨に非ず農家の子弟野々耕し牛を逐ふの身にして高尚なる動植物學の講義を日常衣食の道に遠くしては其效能も亦薄しとは我輩の持論あらん世の中の事物には適當の度合あるものにして外へば教育の事の如きも日本人の身代考へ又その知識の程度も測りて能く實地を勘辨せざれば時に教育偏重の弊無き能はず又其費用の増加をのみ指すハ限らず教育費の議論は別にして只教ふる所の學問科程が其學生の身分ふ適切するか、せざるかにて亦利害を殊よするを免れるあり即ち一步を進めて論すれば後來其學生が一箇人として世に立つて曉に至り曾て其身に得たる學校の教育が本人の衣食住を助くるに役立つ者ならざれば先づ其教育を許して効用薄しと云ふも然る可し是れ乃ち以と知るべし蓋も讀書算術作文等の數科を除き其他の西洋諸國に於て近時實業教育論の盛んあるに至りし所以と知るべし蓋も讀書算術作文等の數科を除き其他の學問知識に至りては農家の子弟と商家の子弟と其間に緩急の別ある事當然の道理にして更に仔細に論すれば同家農家の子弟に於て其土地け氣候に由り物産に由り又其市場の關係に應じて様々の取捨變更無うる可らず商家の子弟といへども其趣さは之に均しく例へば開港場離居地の小學校あらば何は皆置き學生に外國の言語を教ふる事肝腎なれ共少しく内地に進入して商賈の模様較や異なる所に於ては先づ商賈の認め方或は算術簿記の稽古等を第一にして外國語學の如きは假りに之を第二著に廻して差當り不都合は無うるべきあり孰れにしても其土地の狀態に相應して學生の爲めの科程を加へて之れを教へんふとを祈るものなり其理由果して是よりは我輩は爰に取敢へず農家の子弟を如何にと云ふに抑も養殖の事業は日本の風土に適して特よ將來の需要たり盛大の一方されば之を以て日本本の富源を聞く可しとは我輩の毎々申し陳べたる所以の理由果して是よりは我輩は爰に取敢へず農家の子弟を作り麦を作るの業に比して一層學理の應用を要するが故に從前より散漫なる仕方にては十分に見込み有る可からず今日までの養殖は云ひて農家の手心一つにして習慣手練の外よ便るべきも更に無うりしあれ共元來觀見は生物にして其發育成績は順序總て動植物學の範囲に於て之を研究するは容易の業なり故に例へば養殖の始めより播下、眠りの加減若しくは其收穫失れ、順序を立て、教授しさば完全なる一科の理學にして尋常小學の科程には固より高尚に過ぐるの

恐れ無きに非すと雖ども我輩の注文は決して高尚なものを致しへしと謂ふには非ず簡易淺近を要するは勿論あれども例へば動物學の教授に於ては農家の子弟野々耕し牛を逐ふの身にして鹿爪らしき道理を知るとするも人生

に綠の遠き他の諸動物の講義よりも専ら觀兒の性質組織等を研究せしめ又植物學の篇に在りても専ら桑樹の栽培法を教授する事と定め學校教師が率先して現場に桑樹を育む桑作りを學ぶとして同時に其實業教育と受け

し先たらば就學子弟の將來を圖りて利益効驗の夥去きは争ふ可からざるの事實ならん蓋し實業教育の主眼に於て市街の學校には商業學を重しとし村落の學校には農業學を第一とするは無論の事にて同じ實業の學の中にも學理に基き實驗を示して教授するの有用あるもの

は又養殖科程に若く可からず且つ右の外に養殖と實業教育の科程と爲すは利益と申すは日本國中到る所と

して此科目は農家の子弟に適合せざるなく即ち其要用最も廣くして何れの土地にも當嵌まるの一事を在りと雖ども中に又説を立て、養殖の教師を如何よすべき

や全國村落の小學校、無數の教員中には養殖の事を知らざる者百中の九十九あらん農家の子弟に此科程を授

くるは妙な事とも授業者に其心得無く夫ては議論も無

用な」と云ふ人もあらんあれども我輩の所望は左様に

なり

とならば其教師の練習は一二期にして足るべし養殖

の鉢家たるを要するに非ず又深奥の學理を究むるにも及ばず通常養殖の知識兒童は心得となり得る丈だけにて十分なり近年伊太利にて小學校より養殖科を加へて好結果を奏したる所ありと聞けり他國の事は兎も角も日本農家の實業教育は先づ養殖科と以て第一と信するものなり

左に營業上收支の金額を各年度に區分して其の割合を示す

年 度	大垣半田間純益金累年割合比較表			資本額に對し 支出の割合
	高崎直江津間純益金累年割合比較表	継益金	資本額に對し 支出の割合	
明治十九年度	一四〇六八	一、二七四	〇、〇〇八六	一、六七九
明治十八年度	一四〇三二	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十七年度	一四〇三一	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十六年度	一四〇三〇	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十五年度	一四〇二九	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十四年度	一四〇二八	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十三年度	一四〇二七	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十二年度	一四〇二六	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十一年度	一四〇二五	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十年度	一四〇二四	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治九年度	一四〇二三	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治八年度	一四〇二二	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治七年度	一四〇二一	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治六年度	一四〇二〇	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治五年度	一四〇一九	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治四年度	一四〇一八	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治三年度	一四〇一七	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治二年	一四〇一六	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治一年度	一四〇一五	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治零年度	一四〇一四	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九

年 次	同營業上收支割合比較表			備考
	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合	同第一區線純益金	同第一區線純益金	
十六年下半期	一、二二、四一	一、一七四	一、一七四	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
十五下半年	一、二二、四一	一、一七四	一、一七四	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
十四年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
十三年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
十二年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
十一年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
十年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
九年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
八年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
七年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
六年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
五年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
四年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
三年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
二年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
一年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合
零年	一、一九、一	一、一九、一	一、一九、一	日本鐵道會社に於て 株券總額中より鐵道建設費に對する割合

年 度	營業上收支割合累年比較表			收入に對する 支出の割合
	年 間	營業收入	營業費	
明治十九年度	一四〇六八	一、二七四	〇、〇〇八六	一、六七九
明治十八年度	一四〇三二	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十七年度	一四〇三一	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十六年度	一四〇二九	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十五年度	一四〇二八	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十四年度	一四〇二七	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十三年度	一四〇二六	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十二年度	一四〇二五	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十一年度	一四〇二四	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十年度	一四〇二三	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治九年度	一四〇二二	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治八年度	一四〇二一	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治七年度	一四〇二〇	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治六年度	一四〇一九	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治五年度	一四〇一八	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治四年度	一四〇一七	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治三年度	一四〇一六	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治二年	一四〇一五	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治一年度	一四〇一四	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
零年	一四〇一三	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九

年 間	副領事來着 教賀大垣間純益金累年割合比較表			内閣總理大臣伯爵伊藤博文
	東京ヨリ鎌守府ニ達スル道路及鎌守府ト鎌壺ト拘聯ス	内閣總理大臣伯爵伊藤博文	内閣總理大臣伯爵伊藤博文	
明治十九年度	一四〇六八	一、二七四	〇、〇〇八六	一、六七九
明治十八年度	一四〇三二	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十七年度	一四〇三一	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十六年度	一四〇二九	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十五年度	一四〇二八	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九
明治十四年度	一四〇二七	一、一七四	〇、〇一六二	一、六七九